

性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプ¹

聖徳大学 伊藤裕子

Gender stereotypes arising in a state of gender awareness

Yuko Ito (Faculty of Humanities, Seitoku University, Iwase, Matsudo 271-8555)

This study examined the structure of gender stereotypes which might arise in the state of gender awareness that was triggered by social situations where people perceived their gender differences strongly. Out of 1 500 residents in Tokyo aged between 20—60, 342 females and 313 males were randomly chosen and answered the questions about gender consciousness in the state of gender awareness. A factor analysis revealed that “maternity” and “trustworthiness” were the dominant dimensions of gender stereotypes in the state of gender awareness, and that trustworthiness particularly formed the basis of gender stereotypes. Generation differences in gender stereotypes were also revealed between women in their 40 s and 50 s, and between men in their 30 s and 40 s. Generally, power for men and nurture for women were more likely to be perceived in a state of gender awareness.

Key words: gender stereotype, age, sex, adults.

私たちは普段それほど性差を意識していないときでも、危急な事態や困難な場面に遭遇したとき、あるいはごく日常的な場面でも、“〇〇は男でなくては”“やはり〇〇のときは女性でないと”と思うことがしばしばある。子どもが病気をしたり、体が弱って介護を受けるとき、あるいは危険な場面に出くわしたり、トラブルに巻き込まれたとき、世話をしたり、事態を解決する人物に要求されるのは、その事態にふさわしい特性を備えた人物一般というより、その性であってほしい、その性でなくては困るというように特定の性に結びつきがちである。それはそれぞれの事態で要求される特性——的確な判断や素早い決断、さらに体力や勇氣、あるいは細やかな心配りや共感性、献身性——が、一般にジェンダー・ステレオタイプとして人々にもたれている男性性、女性性の中核的特性に一致するからにほかならないからである。なお、ここでいうジェンダー・ステレオタイプとは、Lippa (1990) によれば、“女性と男性のパーソナリティ特性、能力、社会的役割、身体的特性、性的行動についての社会的信

念”と定義される。

ジェンダー・ステレオタイプの内容については、どんな特徴が男性的あるいは女性的と考えられているかについてこれまで多くの研究がなされてきた。それら研究の多くは男性性と女性性を、道具的特性・表出の特性あるいは作動性・共同性として記述している (e.g., Bem, 1974; Spence, Helmreich, & Stapp, 1975)。しかし、この四半世紀、多くの国々がフェミニズムの影響を受けたにもかかわらず、男性性・女性性についてのジェンダー・ステレオタイプにあまり変化がないことが報告されている (e.g., Lewin & Tragos, 1987)。我が国でも土肥 (1995) が、伊藤 (1978) のMHFスケールを再検討したところ、20年近く前に作成された項目が現在でも妥当であることを明らかにしている。また、ジェンダー・ステレオタイプは文化が異なっても共有され、たとえば、25か国の男女大学生に男性と女性を記述するパーソナリティ特性を評定させたところ、多くの国でその内容が共通していた (Williams & Best, 1990)。何が“男らしさ”で、何が“女らしさ”かについてのパーソナリティに関するステレオタイプの特質には、確かにあまり変化がみられていない。

一方、ジェンダー・ステレオタイプの構造に関しては、少なくともジェンダーに関する知識が多次元なので、ジェンダー・ステレオタイプには身体的な外見、

¹ 本研究は、(財)東京女性財団による平成6・7年度の課題研究“性差意識の形成環境に関する研究”(主任研究員伊藤裕子)の一部を用いて行った。研究員としてともに作業を担った横浜市立大学 川浦康至教授、東京都立大学 江原由美子教授に感謝するとともに、研究の機会を与えて下さった同財団にこの場を借りてお礼申し上げます。

態度、興味、心理的特性、社会的関係、職業などに関する情報が含まれており、しかもそれらの次元は相互に関連しあっているといわれている。たとえば、二つの次元（身体的特徴と心理的特性）について情報が与えられた後、第三の次元（役割行動）で性的に型づけられている程度を評定させると、一つの次元についての情報は他の次元についてくさす判断に明らかに影響していた (Deaux & Lewis, 1984)。Ashmore, Del Boca, & Wohlers (1986) はジェンダー・ステレオタイプを、女性と男性の個人的属性についての構造化された信念のセットだと述べているが、私たちは個人についてほとんど情報がなくても、その人の外見や心理的特性、そして行動についてかなり多くのことを推測する。それはジェンダー・ステレオタイプの構造に拠っているからである。

そこで本研究では、冒頭に掲げたような事態を性差覚醒状況と名付け、それを“人が性差（性別）を強く意識する社会的状況”と定義したうえで、そのような状況におけるジェンダー・ステレオタイプを問題にしたい。すなわち、“〇〇は女/男でなければ”とあえて性別を限定するような社会的場面や状況の特徴を明らかにすることによって、ジェンダー・ステレオタイプの中核的特性を抽出できるのではないかと考える。Fiske & Stevens (1993) は、ジェンダー・ステレオタイプの特殊性としてその規範的な性格をあげており、ジェンダー・ステレオタイプは集団メンバーの属性を単に記述するだけでなく、集団にふさわしい行動を規定する規範的な性格をもつという。しかもそれは、Ashmore et al. (1986) によれば、属性の記述というよりむしろ差異の記述だといわれる。性差覚醒状況とは、このような規範的側面が強く働くような場面・状況だと考える。

第二に、性差覚醒状況でのジェンダー・ステレオタイプは性や年齢に関してどのような傾向がみられるかという点である。性役割態度については、これまでデモグラフィックな要因に関して多くの知見が得られており、東・鈴木 (1991) の展望によれば、一般に男性のほうが女性より伝統主義的であり、他方、年齢が若いほど、教育レベルが高くなるほど態度が平等主義的になるという傾向が明らかにされている。ステレオタイプにおいてもそれを肯定する程度に個人差があり、男性は女性よりジェンダーについてステレオタイプ化された考えをもちやすく、また、教育歴の長い人のほうがステレオタイプ化される傾向は小さいという (Basow, 1992)。性差についてはどの研究もほぼ一貫して男性のほうが女性より伝統主義的な態度をもち、ステレオタイプが強いことを明らかにしている。しかし、性差に関して必ずしも認知と態度が同じ傾向とは限らない。ジェンダー・スキーマの個人差をみた伊藤 (1997) によれば、大学生において性差観に性差はな

いが態度では男性のほうがより非平等主義的である²、あるいは成人においても性差観に性差はないが男性のほうがより伝統主義的な態度をもつというように (伊藤, 2000)、認知と態度にはギャップがみられている。また、年齢については必ずしも直線的な変化ではなく、性差観のような認知的側面で、ある明らかな世代差の存在が指摘されている (伊藤, 2000)。そこで本研究では、性差覚醒状況において、そのジェンダー・ステレオタイプに性および年齢に関してどのような特徴がみられるかを検討する。

方 法

調査対象および方法

調査対象者は、東京都区市に在住する 20 歳以上 60 歳未満の男女で、住民基本台帳に基づく層化二段無作為抽出法により 1 500 名を抽出した。調査方法は訪問依頼・郵送回収法をとり、女性 342 名、男性 313 名、計 655 名 (回収率 43.7%) の回答を得た³。調査は 1995 年 2 月に実施された。

調査内容

性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプの構造を明らかにするため、独自に項目を作成した。性差覚醒状況とは、人が性差を強く意識する (させられる) 社会的状況、あるいはなんらかの社会的事態において特定の性別が喚起される状況をいい、性格や能力、行動、身体面で人々が感じる性差を直接問題にするものではない。すなわち、私たちは日常のなかで“〇〇のときはやはり男/女でない” (肯定的記述)、あるいは“だから男/女ではだめなのだ” (否定的記述) というように、性別を限定する表現をしばしば使用する。そこで場面 (仕事、家庭、学校、対人関係、その他) と対象 (自分に関すること、他者一般に関すること) の 2 軸に沿って研究者 3 名 (心理学 2 名、社会学 1 名) により項目が収集された。類似した内容の項目が整理された後、最終的に 19 場面が用意された。評価は、各場面について“そう思う (4)”―“そう思わ

² 伊藤 (1997) では、性差観の妥当性を検討するため、鈴木 (1994) の平等主義的態度スケール短縮版を大学生に実施した。そのためここに記された内容は同論文には記載されていない。なお、性差観は女子 75.26 ($SD=14.17$)、男子 73.75 ($SD=12.71$) で性差はなく ($t=0.69$, $df=155$)、平等主義的態度では女子 51.56 ($SD=9.95$)、男子 47.73 ($SD=10.07$) で性差がみられた ($t=2.37$, $p<.05$, $df=155$)。

³ 世代別対象者数の内訳 (人数)

	20代	30代	40代	50代
女 性	71	82	101	88
男 性	72	67	102	72
計	143	149	203	160

Table 1
性差覚醒状況における性差意識の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	共通性
f. 子どものちょっとした変化に気づくのは、やはり母親だと思う	.65	.15	-.18	.44
d. 子どもが小さいうちは、やはり母親でないとだめだと思う	.56	.31	-.22	.47
n. 健康や生活にかかわることがらに敏感なのは、女性だと思う	.53	.19	-.18	.35
b. 子どもが病気などで苦しんでいるとき、それをわがこととして感じとれるのは、やはり母親だと思う	.44	.14	-.19	.26
h. 年頃の女の子の気持ちは、やはり母親でないとだめだと思う	.44	.32	-.09	.31
q. 大地震や火事など緊急事態のとき、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う	.22	.59	-.21	.44
s. 人から危害を加えられそうになったとき、身を守るには、やはり男でないとだめだと思う	.21	.53	-.10	.34
m. 仕事上で重大なトラブルが生じたとき、それを解決するのは、やはり男でないとだめだと思う	.31	.40	-.34	.37
o. 重いものを運んでもらうとき、やはり男でないとだめだと思う	.26	.40	-.12	.24
k. 仕事のミスを指摘されて言い訳をする女性をみると、だから女はだめなのだと思う	.21	.12	-.58	.39
c. 産休や育休で休職をする女性教師のクラスの子どものことを考えると、だから女性教師に担任されるのは困ると思う	.17	.15	-.56	.37
a. 中学・高校の生徒指導は、やはり男性教師でないとだめだと思う	.17	.17	-.50	.31
i. 公の場での私語の多さをみると、だから女はだめなのだと思う	.11	.14	-.50	.28
p. 自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒をみてもらいたいと思う	.42	.38	-.12	.34
e. 子どもが年頃になってなかなか言うことをきかないときは、やはり父親が言わないとだめだと思う	.34	.38	-.29	.34
2乗和	2.04	1.61	1.59	5.24
寄与率 (%)	13.59	10.73	10.59	34.91

ない(1)”の4件法で求められた。

このほかに、ジェンダー・ステレオタイプとの関連をみるため、ジェンダー・スキーマの測度として性差観スケール(伊藤, 1997) 30項目が同時に施行された。性差観スケールは、ジェンダーにかかわる事柄や状況をどの程度性別に関連づけて認知するかをみるもので、能力、性格、外観、身体・生理、行動様式について記述された項目からなる。なお、これらの項目はいずれも性差意識にかかわる多岐にわたる調査内容の一部をなすものである。

結 果

性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプ

人が性差(性別)を強く意識する状況を性差覚醒状況とし、そのような場面における性差意識がどのような構造をもつかを明らかにすることを目的とした。まず、19場面について、653名の回答に基づき相関行列を算出し、主因子解、バリマックス回転により因子分析を行い、3因子を抽出した。このうち、どの因子にも負荷しない残余項目(因子負荷量.35以下)4項目

を除き、15項目で再度因子分析(主因子解、バリマックス回転)を行った。その結果がTable 1である。結果の解釈に際しては、負荷量.40以上の項目を採用した。項目p, eは二つの因子に同時に負荷しているので、独立性の点からこれらを除いた。

まず、各因子に高く負荷した項目からその因子内容を検討した。第1因子は、女性が果たす役割のなかで特に母親役割に限定したものである。子どものちょっとした変化に気付いたり、子どもの痛みや苦しみを我がこととして感じ取る、そのような子どもに対する敏感さや共感能力を備えているのは母親であり、また、他の時期はよしとしても、子どもが小さいうちや女の子が年頃のときは母親でないと用をなさないというように、女性性のなかでも共感性、献身性が要求されるケア役割を中心とした“母性”にかかわる内容といえる。

第2因子は、緊急事態や危機に直面したときの男性の力、パワーを記述したものである。安全に日常生活が送れるうちは、あるいは仕事が順調に遂行されているうちは特に問題とされることはないが、その日常性が脅かされたり、均衡が崩れたとき、あらわになるの

がジェンダーである。すなわち、“いざというとき、やはり頼りになるのは”という表現に象徴されるように、この因子は“男性の頼もしさ”にかかわるものといえよう。

第3因子は、主に仕事上での女性の適性について記述したものである。教師のように女性の職域として定着したものであっても、妊娠・出産にかかわったり(母性)、力や権威にかかわる事柄(頼もしさ)で適性に欠けるとみられてしまう。また、仕事に限らず、女性は公的な場でそれにふさわしい振る舞いができないというように、この因子は“公領域での女性の適性欠如”を表したものといえよう。

次に、信頼性をみるために各因子の内的整合性を検討した。因子を構成する項目(第1因子5, 第2因子4, 第3因子4項目)の単純加算値を尺度値とし、 α 係数、および尺度値とその尺度に含まれる項目との単相関を算出した。結果は、“母性” $\alpha=.73$, $.63 < r < .74$, “男性の頼もしさ” $\alpha=.67$, $.62 < r < .79$, “公領域での女性の適性欠如” $\alpha=.68$, $.68 < r < .74$ であり、 α 係数の大きさは尺度に含まれる項目数に比例することから、ここでは項目数が少ないので α が必ずしも十分な値とはいえないが、単相関の値も高いことから、内的整合性はあるといえよう。

さらに、ジェンダー・スキーマの測度としての性差観と各因子との関連をみた。性差観はジェンダーにかかわる認知的枠組みとされ、その枠組みが強く働く状況が性差覚醒状況と考えたからである。その結果、“母性” $r=.60$, “男性の頼もしさ” $r=.64$, “公領域での女性の適性欠如” $r=.58$ で高い相関が得られ、個人のもつスキーマが強ければ覚醒状況において性差意識が強まることが明らかにされ、構成概念妥当性の一部が明らかにされたといえる。なお、性差観は平等主義的態度と高い関連をもち(伊藤, 1997), 性別役割分業や別姓選択への態度に影響を及ぼす(伊藤, 2000)という点で、性役割態度への予測性が高いといわれており、本尺度の構成概念を検討するうえで適切なものといえよう。

性および年齢によるジェンダー・ステレオタイプ

性差覚醒状況における性差意識が、性および年齢によってどのように異なるかを検討した。なお、ここで用いる尺度値は各尺度に含まれる項目の単純加算値である⁴。年齢は10歳ごとに4水準とし、性と年齢を要因とする2要因分散分析を因子ごとに行った。結果は、“母性”で性($F(1, 645)=6.54$, $p<.01$), 年齢($F(3, 645)=8.11$, $p<.001$), “男性の頼もしさ”で性

($F(1, 645)=6.08$, $p<.05$), 年齢($F(3, 645)=3.80$, $p<.01$), “公領域での女性の適性欠如”で性($F(1, 645)=7.81$, $p<.01$), 年齢($F(3, 645)=13.03$, $p<.001$)のいずれも主効果が有意であり、交互作用はみられなかった。多重比較検定にはScheffe法を用いた。結果をFigure 1に示したが、尺度得点は、他の尺度と比較しやすいように各尺度に含まれる項目数で除してある。

まず、“母性”では、男性よりむしろ女性のほうが性差意識は強く、年齢では20—40代で差はみられず、40代以下と50代との間に大きな差がみられた(20代

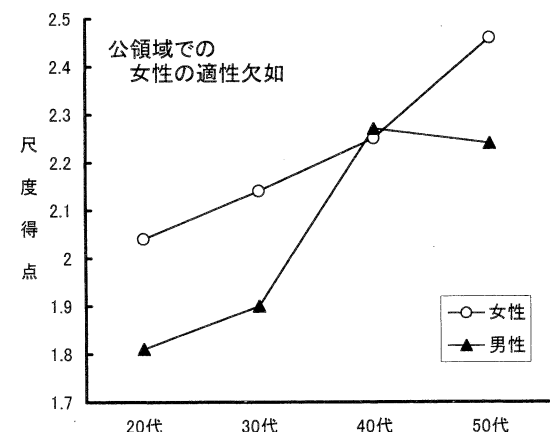
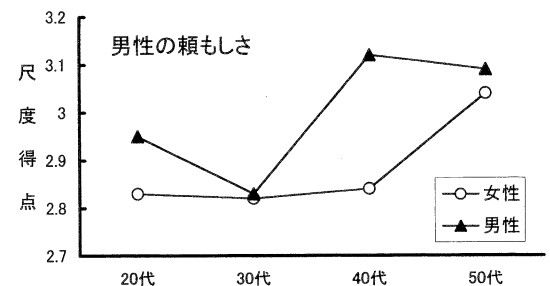
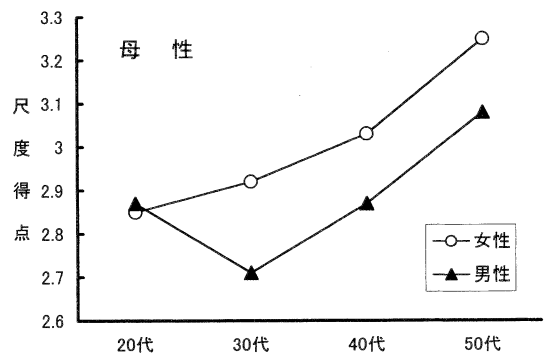


Figure 1. 性と年齢による性差覚醒状況における性差意識。

⁴ 尺度値に因子得点でなく項目の単純加算値を用いたのは、調査ごとに因子分析をしなおさなければならず、因子構造が多少でも異なると得点の比較ができなくなるからである。

—50代 $F=5.18$, $p<.001$, 30代—50代 $F=6.72$, $p<.001$, 40代—50代 $F=2.99$, $p<.05$, いずれも $df=3$, 645)。“男性の頼もしさ”では、逆に男性のほうが性差意識は強い。年齢による差は、女性では40代以下と50代との間で、男性では30代以下と40代以上との間で差がみられた (30代—50代 $F(3, 645)=3.25$, $p<.05$)。“公領域での女性の適性欠如”では、やはり男性より女性のほうが性差意識は強い。世代差も大きく、女性では40代以下と50代との間で、男性では30代以下と40代以上との間で大きな差がみられた (20代—40代 $F=6.61$, $p<.001$, 30代—40代 $F=3.40$, $p<.05$, 20代—50代 $F=9.61$, $p<.001$, 30代—50代 $F=5.85$, $p<.001$, いずれも $df=3, 645$)。

このようにいずれにおいても性差がみられたが、これまでいわれてきたように男性のほうが一様にステレオタイプ化した性差意識をもつわけではなく、性差覚醒状況にあっては、“母性”にせよ“男性の頼もしさ”にせよ、各性が自らの性に期待されている特性を強く意識してステレオタイプ化した性差意識をもちがちだといえる。また、“公領域での女性の適性欠如”でも、一般には男性のほうが非平等主義的な態度が強いといわれているが、性差覚醒状況ではむしろ女性自身にそのような認識が強いことが明らかにされた。なお、世代差はおおむね、女性では40代以下と50代以上で、男性では30代以下と40代以上で開く傾向がみられた。

考 察

普段、私たちはそれほど性差を意識していなくても、何か危機に直面したり、困った事態になったとき、“こういうときは、やはり男/女でなくては”と思うことがある。もちろん、その判断の背景には、男性と女性についてのステレオタイプ化した知識が関わっていることである。本研究では、どのような社会的事態のとき、人はジェンダーに敏感になるのか、性差覚醒状況でのジェンダー・ステレオタイプの特徴を明らかにしようとした。その結果、それは典型的には二つの軸として抽出された。一つは緊急事態、危機的な場面、重大局面において、その事態を切り抜けるのに必要な特性——的確な判断と決断力、迅速な行動とそれを裏打ちする力——を前提としたもので、“男性の頼もしさ”と命名したが、おそらくそれは男性性の中核をなすものといえるだろう。もう一つの軸は、これと反対に日常性にある。子どもに対して母親が示すもの——敏感さと思いやり、共感性、献身性——で“母性”と命名した。これらの特性は女性性としての“共同性”そのものののだが (伊藤, 1986), 性差覚醒状況ではそれが女性ではなく母親にイメージが集約された。一方、第三の軸として抽出されたのが“公領域での女性の適性欠如”であった。“女性の居場所は家庭”とす

る近代家族の呪縛 (落合, 1997) からすれば、公的な領域での女性の振る舞いは目立ちやすく、それゆえ“だから女は”という言葉が浴びせられがちになる。また、一般に否定的な特性は女性に帰属される傾向があることから (伊藤, 1983), こうした女性についての否定的なステレオタイプが抽出されたのだといえよう。

このように、どのような社会的事態のとき人はジェンダーに敏感になるかという点については、緊急事態での“男性の頼もしさ”, すなわち力強さ, パワーであり, 日常性における女性の“母性”, すなわち養育性に象徴されるもので, いずれも身体機能に根ざしたものだと考えられてきたものである。家庭生活を営むうえで, 料理や掃除は夫婦どちらがやっても代替はきく。また, 労働の場においても近年では性別が問題にされることは少なくなってきた。このように“女性と男性がわれわれの社会で演ずる役割には多くの変化が起こっている”, ジェンダーに関連している特性や特徴についての考えはあまり大きな変化を受けていない (Golombok & Fivush, 1994 小林・瀧野訳, 1997) といわれるが, ジェンダー・ステレオタイプの変化のしにくさは, こうした身体機能にかかわるものが根底にあると考えられていることが関係している。実際, 年齢差を時代による変化の一つの指標と考えれば, 世代差が最も大きく現れたのは“公領域での女性の適性欠如”で, ジェンダー・ステレオタイプでも, 社会的な役割関係にかかわる領域には変化が現れやすいといえよう。

ジェンダー・ステレオタイプには, このように変化が比較的しじやうい領域としじにくい領域があることが示唆されたが, そのような領域の存在は, これまでのジェンダー・ステレオタイプ研究における性差の問題にどうかかわってくるだろうか。これまでの研究では, 一般に女性より男性のほうが性役割態度は伝統主義的であり (東・鈴木, 1991; Davis & Robinson, 1991; 鈴木, 1994), 男性のほうがジェンダーについてステレオタイプ化された考えをもちやすく (Basow, 1992), ジェンダー・スキーマも強い (土肥, 1998) といわれてきた。確かに態度にせよ, ステレオタイプにせよ, 伝統主義的か平等主義的かというかたちで1次元上でみればそういえるかもしれないが, 本研究で明らかにされたのは, 判断する対象 (領域) によって性差の現れ方が異なるという点である。すなわち, 性差覚醒状況における性差意識は, “頼もしさ”では男性が, “母性”では女性がより強く意識しており, 自らの性にかかわる内容, しかも男性性・女性性のなかでもさらに中核となる特性に関して, より強い性差意識が働くということが明らかとなった。

しかし, これらのステレオタイプに全く変化がみられないわけではない。女性では40代以下と50代以上

との間で、男性では30代以下と40代以上との間で、特に“男性における頼もしさ”と“公領域での女性の適性欠如”で明瞭な世代差をみせていた。このような女性における40代以下（1946年以降生まれ）と50代以上（戦前・戦中生まれ）の間にみられる世代差が、たとえば“夫は外で働き、妻は家庭を守る”というような性別役割分業意識において、アメリカ、イギリス、フランスの女性でも同様にみられているという報告がある（東京都生活文化局、1994）。それは戦後生まれのベビー・ブーマーといわれた人々が、1970年代以降の第2派フェミニズムの影響を受けた結果と解釈することができよう。だが一方で、男性ではその開きが30代以下と40代以上というように女性とは一世代ずれていた。日本では女性の平等主義的意識変化が男性に先行し、男性の変化はそれに従うといわれるが（児島、1985）、本研究の結果はそれを裏付けるものといえる。

このようにステレオタイプの特徴には変化がみえにくくとも、たとえば“公領域での女性の適性欠如”に顕著にみられるように、その値の低さから、社会的な活動領域に女性が向かないと考える人々が急速に減ってきていることを示しており、少なくとも量的側面での変化は確実に生じているといえよう。本研究では、このように代表性の高いサンプルによってジェンダー・ステレオタイプの世代による時代の変化を読み取ることができた。

引用文献

- Ashmore, R. D., Del Boca, F. K., & Wohlers, A. J. 1986 Gender stereotypes. In R. D. Ashmore & F. K. Del Boca (Eds.), *The social psychology of female-male relations: A critical analysis of central concepts*. New York: Academic Press. Pp. 69-119.
- 東 清和・鈴木淳子 1991 性別役割態度研究の展望 心理学研究, **62**, 270-276.
- (Azuma, K., & Suzuki, A. 1991 Review of research on sex role attitudes. *Japanese Journal of Psychology*, **62**, 270-276.)
- Basow, S. A. 1992 *Gender: Stereotypes and roles*. 3rd ed. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Davis, N. J., & Robinson, R. V. 1991 Men's and women's consciousness of gender inequality: Austria, West Germany, Great Britain, and the United States. *American Sociological Review*, **56**, 72-84.
- Deaux, K., & Lewis, L. L. 1984 Structure of gender stereotypes: Interrelationships among components and gender label. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 991-1004.
- 土肥伊都子 1995 ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ——母性・父性との因果分析を加えて—— 社会心理学研究, **11**, 84-93.
- (Dohi, I. 1995 Gender-related role evaluation of self-concept and gender schema: A causal analysis of motherhood/fatherhood. *Japanese Journal of Social Psychology*, **11**, 84-93.)
- 土肥伊都子 1998 男性性・女性性の規定モデルの実証的検討 四天王寺国際仏教大学紀要（文学部）, **30**, 92-107.
- (Dohi, I. 1998 A study about the determinants of masculinity and femininity: Gender schema and gender identity. *International Buddhist University Bulletin, Faculty of Letters*, **30**, 92-107.)
- Fiske, S. T., & Stevens, L. E. 1993 What's so special about sex? Gender stereotyping and discrimination. In S. Oskamp & M. Contanzo (Eds.), *Gender issues in contemporary society*. Newbury Park, CA: Sage. Pp. 173-196.
- ゴロンボク S・フィバッシュ R. 小林芳郎・瀧野揚三（訳）1997 ジェンダーの発達心理学 田研出版
- (Golombok, S., & Fivush, R. 1994 *Gender development*. New York: Cambridge University Press.)
- 伊藤裕子 1978 性別役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- (Ito, Y. 1978 Evaluation of sex-roles as a function of sex and role expectation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **26**, 1-11.)
- 伊藤裕子 1983 性別役割特性語の研究——肯定および否定的特性語の収集、分類および性の帰属—— PL学園女子短期大学紀要, **10**, 32-45.
- (Ito, Y. 1983 A study for sex-role traits. *Bulletin of PL Gakuen Women's Junior College*, **10**, 32-45.)
- 伊藤裕子 1986 性別役割特性語の意味構造——性別役割測定尺度（ISRS）作成の試み—— 教育心理学研究, **34**, 168-174.
- (Ito, Y. 1986 Factor structure of sex-role characteristics and its relation to agency and communion. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **34**, 168-174.)
- 伊藤裕子 1997 高校生における性差観の形成環境と性別役割選択——性差観スケール（SGC）作成の試み—— 教育心理学研究, **45**, 396-404.
- (Ito, Y. 1997 The formative factors of gender conception and its relationship with a selection of gender roles in adolescents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 396-404.)
- 伊藤裕子 2000 成人の性差観が性別役割態度および性別役割選択に及ぼす影響 心理学研究, **71**, 57-63.
- (Ito, Y. 2000 Influences of gender conception on gender-role attitudes and preference. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 57-63.)
- 児島和人 1985 意識変化の方向・過程・将来 NHK世論調査部（編）現代日本人の意識構造 日本放送出版協会 Pp. 183-213.

- (Kojima, K.)
- Lewin, M., & Tragos, L. M. 1987 Has the feminist movement influenced adolescent sex role attitudes?: A reassessment after a quarter century. *Sex Roles*, **16**, 125-135.
- Lippa, R. A. 1990 *Introduction to social psychology*. Belmont: Wadsworth.
- 落合恵美子 1997 21世紀家族へ(新版) 有斐閣
(Ochiai, E. 1997 *The Japanese family system in transition*. Tokyo: Yuhikaku.)
- Spence, J. T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 29-39.
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
(Suzuki, A. 1994 Construction of a short-form of the scale of egalitarian sex role attitudes (SESRA-S). *Japanese Journal of Psychology*, **65**, 34-41.)
- 東京都生活文化局女性青少年部女性計画課 1994 女性問題に関する国際比較調査
- Williams, J. E., & Best, D. L. 1990 *Measuring sex stereotypes: A multinational study*. Newbury Park, CA: Sage.
- 2000. 8. 24 受稿, 2001. 1. 13 受理——